

# しまね読進協 第51号

発行日 令和6年2月1日

発行所 島根県図書館協会 読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町 52 番地 島根県立図書館内)  
ホームページ <https://www.library.pref.shimane.lg.jp/toshokankyokai/dokushosuishin.html>

## 島根県図書館協会の主な事業

令和5年度

### ◎第1回島根県図書館大会

つなげよう島根の図書館

分ち合おう図書館の未来

11月4日(土) 島根県民会館

基調講演「図書館が私を育ててくれた」

小前 亮氏(小説家)

特別報告「まちと図書館との賑やかな関係」

高橋 真太郎氏(鳥取県立図書館)

加盟団体からの報告

・「公共図書館等の状況(島根県を中心に)」

大野 浩氏(島根県立図書館)

・「子どもたちにお話の歓びを」

天野 和子氏(松江市立中央図書館)

・「絵本と人 人と人をつなぐおはなしレストラン」

内田 絢子氏

・「わくわく学校図書館フェア」

福田 大貴氏(株式会社今井書店)

実演(絵本の読み聞かせ)

岡本 綾乃氏

(島根県立大学人間文化学部保育教育学科4年)

### ◎全国優良読書グループの推薦

(公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰)

・ひだまり(松江市東出雲町)

### ◎読書体験記の募集

応募数 24編

入賞 3編

### ◎「この本いいよ〜島根の高校生・高専生

おすすめの一冊〜」投稿の募集

応募団体 6学校

応募数 71点

### ◎機関誌等の発行・配布

「しまね読進協」第51号

## 第1回島根県図書館大会開催

新型コロナウイルス感染拡大の影響で長らく延期を余儀なくされていましたが第1回島根県図書館大会を開催しました。

図書館の機能や役割をアピールし、図書館と読書の振興を図ることを目指すもので、第1回の大会テーマは「つなげよう島根の図書館 分ち合おう図書館の未来」島根県図書館協会ステップワン!」としました。

午前中の基調講演では、松江市出身の小説家小前亮氏に「図書館が私を育ててくれた」と題してお話いただきました。子どもの頃は松江市立図書館が居場所であったこと、図書館のおかげで読書体験ができ、そこで得た知識、興味、関心は今でも役立つしていると、図書館への想いや自作に関するエピソードなどをユーモアを交えて話されました。

午後からは、鳥取県立図書館の高橋真太郎氏より「まちと図書館との賑やかな関係」と題した報告がありました。人が幸せになるために図書館が貢献できることはいくらでもあり、そのためには図書館も時代に合わせ変わっていかねければならないとし、鳥取県内の図書館の様々な取組を紹介いただきました。



続いて、加盟団体から4つの報告がありました。島根県公共図書館協議会からは2つの報告があり、島根県立図書館の大野浩氏からは、図書館の可能性を拡げるためには情報提供サービスが重要であること、松江市立中央図書館の天野和子氏からは、子どもの想像力を豊かにし、生きる力を育む取組として、お話し前事業について報告がありました。



島根県大学・高等専門学校図書館協議会からは、島根県立大学おはなしレストランライブラリーの内田絢子氏より、児童書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」の取組と学生の読み聞かせ活動についての報告が、島根県書店商業組合からは、株式会社今井書店の福田大貴氏より、児童書約2万点の展示「わくわく学校図書館フェア」の取組についての報告がありました。最後に、島根県立大学4年岡本綾乃氏による大型本「だるまさんと」の読み聞かせを参加者みんなで楽しみました。

受講後のアンケートでは、「図書館と小前先生ご自身の成長との関わり、作品への思いを知ることができ、大変参考になった」「図書館の可能性が広がって、目の覚める思いでした」など、多くの感想をいただきました。

# 読書体験記 入賞作品

## 〈一般の部〉

### 読書の理由

松原 愛 (松江市)



『信仰』  
村田沙耶香 著  
文藝春秋

人はなぜ、本を読むのでしょうか。

わたしは小学生だったころ、本に触れる機会といえは国語と図書の時間くらいでした。けれども、本を読むと必ず誰かがわたしを褒めてくれました。「本はいよいよ」「本なら何冊も買ってあげよう」と言われるたびに、わたしは「本を読むことはいいことなんだ、本は読まないといけないんだ」と思うようになりました。

次に思い出されるのは、高校時代の朝読書の時間。授業が始まる前に、好きな本を十分間だけ読む活動でした。義務感から本を手にとってきたわたしに、好きな本などありません。書店で目についた文庫本を適当に買い、朝読書の時間になると適当にページをめくる。「なぜ読みたいくもない本を開いているんだろう」と思いつつも、見えない誰かの期待に心えるように読書しているふりをしていました。

大学生になり自由な時間はできたものの、そのうち専門書や論文を読むことで手いっぱいになりました。

大人になってからは、読書は仕事に必要な知識や教養を身に付けるツールになりました。「あの本、読みましたか？」という会話についていくために、本を読んでいたのです。

そんなわたしと読書の関係に変化が訪れたのは、つい最近の話です。

今年の夏、仕事と家事の合間に聞いていたインターネットラジオである本が紹介されていました。村田沙耶香さんの『信仰』という小説です。急に思い立ち、帰宅前に県立図書館まで足を延ばすことにしました。その日は夫の帰りが遅く、娘も買ったばかりのおもちゃに夢中で、夕食づくりの前に突然ほっかりと時間ができました。わたしはソファーに横になり、やれやれと借りた本に手を伸ばしました。

そこまではよく覚えています。けれども次の瞬間、はっと我に返って辺りを見まわすと、すっかり部屋は薄暗くなっていました。「やってしまった！」と慌てて娘に目をやると、まだおもちゃに一生懸命で、胸をなでおろしていました。時計の針はちょうど七時を指しています。

よろよろソファーから立ち上がると、窓から差し込む夕日がいともよみまぶしく見えました。母でもない妻でもない、仕事をしている自分でも友人と一緒にいる自分でもない。誰でもない自分になったことへの満足感。日々への不安や不満や焦燥感から完全に切り離されて、背筋が再びすっと立つような爽快感。このとき、自分を大切に扱ったことができたという気持ちがあったしの中に静かに沸き上がりました。

この夏、わたしは三十年間ずっと抱えてきた疑問に対する、自分なりの答えにたどり着いたような気がします。これまで他人軸で生きてきたあまり、本を読む理由というものが、必ずどこかにあるはずだと探していたのかも知れません。けれども最近では、「わたしはわたしのために本を読む」という気持ちで、本を手にとることができるようになりました。本好きを装って

いた過去のわたしに、お疲れさまと声を掛けてあげたいです。

### 審査員コメント

「何が」のための読書から「自分」のための読書へ。読書の楽しみ世界へ自分を解放されていく様子が伝わってきました。

## 〈児童・生徒の部〉

### 好きな本

藤井 あかり (松江南高校)



『関ヶ原 上・中・下』  
司馬遼太郎 著  
新潮文庫

私が司馬遼太郎の本と出会ったのは小学六年生の時だった。スポーツの習い事から帰ってきて、お風呂に入った後、一息ついた夜に、私は本が読みたい気分だった。

「なんか読む本ない？」

と父に聞くと、父の本棚から司馬遼太郎の『関ヶ原』を取り出してきて。上・中・下と三冊もある本で、私は手強い敵が現れたような気持ちになった。絶対に読破してやろうと決めた。当時の私には一頁を読むことさえ困難だった。時間が遅いこともあって、寝そづになりながら読むので、毎回読むたびに後ろの頁に戻っ

て読んでいた。そんなに分厚い本を読めてすごい、と父に褒めてほしいという気持ちもあって、(今見てみると分厚いとは言っても普通の文庫本の分厚さだが)三歩進んで二歩下がるという具合ではあったが最初の決意が揺らぐことはなかった。しかし、結局『関ヶ原』三冊を読み終えることができたのは、中学生になつてからだった。中学生になつて、自分でも知らないうちに読解力が上がったのか、あれほど苦労していたのが嘘のようにスムーズに読み進めることができた。

次に読んだ司馬遼太郎の本は『燃えよ剣』と『風神の門』だった。私が塾を出して学校を休んでいたときに父が買ってきたものだった。熱があったのに時間を持て余して退屈していた私は、一冊を二、三日で読んでしまった。『関ヶ原』を読んだときは登場人物に魅力を感じる余裕はなかったが、『燃えよ剣』と『風神の門』では主役をはじめとした、人物の人間臭さや格好良さを感じた。最近よくあるようなイケメンの歴史登場人物のイラストとは全く質の違う格好良さだ。彼らの確固たる信念やそれを貫き通す強さはとても魅力的だった。その時代背景でなくては生まれなかった独特の価値観を持っていた。

私の友達に新選組が好きな子がいた。イケメンのイラストが格好良いのだから。それで、もは試したいということで、新選組副長土方歳三が主人公である『燃えよ剣』を貸してあげた。すると、思いのほか反応が良くて、彼女はあつという間に司馬遼太郎のファンになつてしまった。さらに彼女は彼女の友達にも司馬遼太郎を布教した。私としては、ああ紹介してよかったなあと思つて、とても嬉しかった。『燃えよ剣』の映画が公開されて、二人で映画を見に行ったこともあった。私は今まで友達と一緒に映画を見たことがなかった。新鮮な気持ちだった。

読書は基本的には一人ですものかもしれない。しかし、本を介することで、共通の話題ができ、友達と今までもよしも仲を深めることができよかつた。つい

先日、『燃えよ剣』を別の友達に紹介した。その友達は新選組が好きなので、歴女なわけでもないが、司馬遼太郎が好きになつてくれるといいなと思う。

#### 審査員コメント

「好き」が同じっていいですね。読書はひとりでも読書体験はひとりじゃなくいい。誰かと一緒に楽しむと、もっと世界が広がるよ、改めて感じました。

#### 本を読むということ

富田 梓 (出雲商業高校)



『エルマーのぼうけん』  
ルース・スタイルズ・ガネット 作  
わたなべ しげお 訳  
ルース・クルスマン・ガネット 絵  
福音館書店

私は本が好きです。なぜなら本は、自分を未知の世界へ連れていってくれるからです。現実ではありえない空想の世界、私が人生で体験しないであろう世界、動物視点からの世界などと、本は今まで見たことのない景色や世界を見せてくれます。

私は、幼い頃よく図書館に通い絵本や児童向けの小説を借りて読んでいました。よく読んでいたのは冒険物の小説です。自分と同じくらいの年齢の主人公が、大昔にタイムスリップしてみたり、巨大な森を探検したりとあらゆる想像を掻き立てました。特に今でも強く印象に残っているのは、『エルマーのぼうけん』です。これは、九歳の男の子が竜を助けに動物島に向かつていく物語です。あらかじめエルマーが準備していたものが、様々なところで役に立っていく描写がとても

気に入っており、今でも鮮明に思い出せます。まさかの方法で困難を乗り越えていくエルマーは、幼い私にとってたくさんの視点や世界を見せてくれました。今思うと、『エルマーのぼうけん』のよつな『険小説』は、多面的な視点で物事を見る力、困難を乗り越えるアイデアを考える柔軟さを与えてくれていたのかなと思います。本は私に、未知の世界に連れて行ってくれることで自然と想像力をつけてくれた恩人であるのです。

さらに、本に対して中学生のときに感じたことがあります。それは、本を読むことにつれて物事の理解が速くなるということです。言葉は、相手の受け取り方によっては語弊が生じたり意味合いが変わってきます。この事に気づくまでは、伝える側の言い方が悪いので語弊が生じても仕方ないと思っていました。ですが、徐々に伝える側が完全に悪くはななくむしろ受け取る側に問題があることが多いことに気がつきました。

では、なぜこのような問題が起きてしまうのか、それは話の流れを理解できていない、物事を処理しきれないことだと思えます。私は、本を読んできたことで友人や家族との会話のなかで話が理解できないということが少なくなりました。これこそ本の力なのか、ここ最近で一番本の力を思い知りました。

最後に、本が私たちに与えてくれる力は数えきれないほどあると思えます。知識や精神的な学びの他にも、本を読むことで本の中の人物に共感し勇気づけられ、また明日も頑張ってみようと思える、背中を押してくれる力があります。本をたくさん読むことで、価値観や考え方が変わり、下手したら人生が大きく変わるかもしれません。それほど、本は希望にあふれるツールであり、教科書でもありません。私は、これからもたくさん本に触れて様々なことを学び、人としてたくさん成長できるように本を読み続けていきたいです。

#### 審査員コメント

自らの読書歴を振り返り、あらためて読書の良さを実感しよう。

令和5年度

# 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「ひだまり」が全国優良読書グループとして表彰されました。

## ◆ひだまり（松江市東出雲町）

代表者 永島 睦子

平成十年、読み聞かせボランティアとしての活動を開始し、現在四十〜七十代の幅広い世代のメンバー十三名が在籍しています。

当初は、小学校を主体にしつつ、地域の保育園、幼稚園、高齢者施設等で読み聞かせ中心の活動を重ね、コロナの自粛期間中も回数は減らしつつ継続してきました。

現在は、小学校の全クラスを対象に朝の読み聞かせ「さわやか読書」と、昼休みの読み聞かせ「ひだまり読書」を、また、保育園・幼稚園では、三歳児と四歳児クラスを交互に、毎月、読み聞かせ「おはなしいいね」を行っています。さらに、長期休暇中には児童クラブにおいて、読み聞かせ「ひだまりタイム」の活動も行っています。

活動は、当初からメンバーの都合に応じ、無理しない自由参加型としており、それが継続のベースとなっています。

スタートから四半世紀、ボランティアとして活動させていただくことに感謝し、今後も、地域の子どもたちの読書推進に貢献し続けていきたいよう、メンバー全員で力を合わせて歩んでいきたいと考えています。

# 「この本、いいよ！」

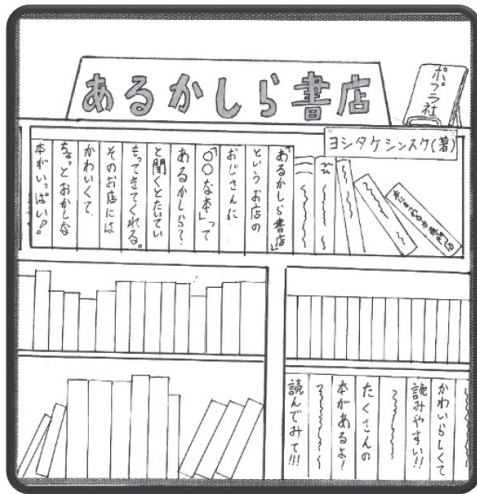
島根の高校生・高専生  
おすすめの一冊

今年も県内の高校生、高専生から71点のおすすめの本の投稿がありました。その一部を紹介いたします。  
※一部編集して掲載しています。



## 『あるかしら書店』

ヨシタケシンスケ／著 ポプラ社

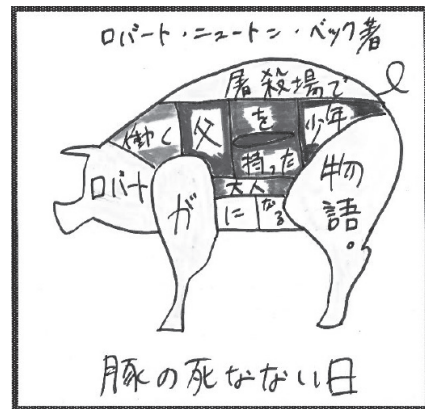


「あるかしら書店」というお店のおじさんに「〇〇な本」ってあるかしら？と聞くとたいいもってきてくれる。そのお店にはかわいくて、ちょっとおかしな本がいっぱい！かわいらしくて読みやすい！！たくさん本があるよ！読んでみて！！

（1年 ななみ）

## 『豚の死なない日』

ロバート・ニュートン・ペック／著 白水社



屠殺場で働く父を持った少年ロバートが大人になる物語  
（3年 らんちう）